

「京都ニュース」の復元と活用について

大阪芸術大学 映像学科 教授 太田 米男

『京都ニュース』は京都市広報局が製作し、1956（昭和31）年から1994（平成6）年まで、市中の映画館で上映されてきたが、製作されて60年が経過し、その映像は文化財的な価値が生まれている。市民生活や都市開発、それに伴う景観の変化、祭事や福祉、国際交流や文化活動など時々のトピックもあり、学術的にも文化的にも、京都市民の歴史であり、生活風俗の貴重な映像群である。

京都市の施策「みんなごと京都お宝バンク」というのがあり、私の所属する（一社）京都映画芸術文化研究所（おもちゃ映画ミュージアム）にも協力依頼があった。その際、『京都ニュース』こそお宝バンクに相応しいことを訴えた。京都市歴史資料館に大量にネガ原版が保管されていることがわかり、京都市と共に当法人名で「昭和31年から平成6年頃京都市が制作した『京都ニュース』の保存と活用プロジェクト」を「お宝バンク」No. 234として登録した。

京都市歴史資料館での調査を数回行い、その結果『京都ニュース』の35mmネガ原版457本。その1缶ごとに開封し、内容調査を行った。一部ポジ・プリント（上映用ポジ・フィルム）があり、すべての画・音ネガ原版が残っていない事が分かった。本来画・音ネガ原版は各1巻ずつが必要で、488本がなければならず、30巻以上が欠落している。また経年劣化で、資料館室内は酢酸臭が充満し、復元できないフィルムもあることがわかった。目視程度だが、映像の状態をAからDまで劣化度で示した。（Aは通常のフィルム、Bは退色などの劣化と酢酸臭が始まりかけたもの、Cは強い酢酸臭を放ち、劣化が進み、縮みや歪みが出来だし、まだ修復復元が可能なもの。Dは復元不可能なもの）。結果、残存原版中、30本以上が修復不可のDランクであることが分かった。

京都市歴史資料館では、10数年前に一部ビデオ化を行い、市民サービスとして、それらの映像を公開していたが、今ではその施策も終わり、終了した事業であるという認識だった。公開したDVDが7枚あり、そのDVDから市民に理解を得るため、映画祭などでの上映を提案した。

ビデオ化された映像は1956年から1970年までの70作品で、欠落したものも多く、1970年代から1994年までの映像は全く手つかずの死蔵状態にあることが分かった。

新聞などメディアの援護もあり、「京都国際映画祭」ほか「祇園天幕映画祭」や「京まちなか映画祭」でも上映することができた。ただ、デジタル映像化したものは活用できるが、未作業の映像をどのように紹介するかを模索することになった。

毎年開催している第13回「映画の復元と保存に関するワークショップ」の中で、中間報告を行ったので、そのあらましを記す。

1、『京都ニュース』の誕生と歴史—「京都市民憲章」を広く理解してもらうための施策で、当時全盛期にあった映画館での上映を行うことが最も市民に伝わる

効果的な方法であった。しかし、テレビの普及に象徴される高度成長期に、映画界は衰退を余儀なくされた。観客動員数11億を超えた時期から下降線をたどり、シネマ・コンプレックスができる、最も動員数の少ないバブル崩壊期に、「京都ニュース」は終了している。その最終号は「建都1200年記念」であった。

2、市の施策を広く広報することを目的に始められた「京都ニュース」だが、製作された39年間の市政の歴史ではあるが、製作より60年を経過して、文化人類学的な観点や社会学的な研究素材としても、貴重な学術的資料となる。

3、現状調査—京都市歴史資料館だけでなく、市役所などにも大量に残存したフィルム原版が劣化し、それらを何とかしたいという思いはあるが、過去の施策であり、今は単に死蔵された状況にある。各映画館での上映数だけプリントされている筈であり、多くのフィルムが散逸している。その中で、公民館などでの上映用に16mmフィルムにもプリントされたものがあり、それらが立命館大学アトリサーチセンター（以降、ARCと略す）にも保管されている。

4、復元と保存—フィルム保管庫を所有しない京都市としては、原版保存に関しては、国立映画アーカイブに委託保存すべく、専用ラボでのフィルム調査が始まった。

5、反響と課題—ワークショップ参加者からの反応は辛辣だった。映像保存に、多くのアーキビストたちが関心を持ち、最新技術で復元されているものと対照的に放置状態にある「京都ニュース」に対し、様々な提案があった。これらの提案を京都市と共有する。

以上のようなワークショップでの反応やその後の報告によって、フィルム原版の保存は、国立映画アーカイブへ寄贈する方針で進められることになり、保存面では安心だが、まだ、デジタル化が出来ていない映像をどのようにするかは、その活用方法を探ると共に、内容に関するデータベース化を進めることが焦点となった。

ARCがどのような経緯で「京都ニュース」が所蔵することになったかは、今では定かではない。そこで、京都市とARCと当研究所が共同でデータベース化に取り組み、16mmプリントからビデオ（デジタル）化を行うことを、活用方法の一つと考えている。画質などの問題はありますが内容を網羅し、データベース化することによって、「京都ニュース」の全容を解明することができる。

現在のところ、京都市、ARCの協力を得て、16mmフィルムからのデジタル化をめざし、研究作業を進めつつあり、広く共同研究者を募っている。

尚、一般社団法人京都映画芸術文化研究所のホームページに「京都ニュース」の項を設け、今後の課題も含め、継続して報告して行く。ウェブサイトでは静止面で構成、保存状況や課題、進捗状況などを報告してゆく。

<http://toyfilm-museum.jp/kyotonews/>